

愛知少年院における矯正教育の事例研究

－更生支援パートナー犬・プログラムの現地調査を踏まえて－

中村 智帆

概要

少年院の矯正教育においては、様々なプログラムが組まれている。本論は、その中でも、子どもたちの情操を育てることを目的とした犬を用いたプログラム、「更生支援パートナー犬プログラム」に焦点を当て検討を加えた。事例調査に当たり、院生たちと共に、筆者がプログラムに参加観察し、その状況や特徴につき、エスノグラフィーの手法を用いて論述した。

1. はじめに

少年犯罪の実数は年々減少しているが、犯罪者総数における少年人口比は成人に比べるとまだ高どまりしている。「少年非行は時代を映し出す鏡だ」¹との指摘にあるように、少年たちの犯罪には社会の闇が深く関わっている可能性がある。

少年犯罪における矯正教育では、第一に、「人の痛みが分かること」、「心のありかた」、「心の動き」など、心の表し方を学ぶことが重要とされている。その教育の一環として数種類のプログラムが組まれているが、筆者は、その中でも、犬を用いた指導をしている少年院の事例を調査し検討を加えることにした。その背景には、これまで動物介在教育や療法についての研究を重ねた結果、子どもたちの学びのサポートに動物

の介在が非常に有効なのではないかとの筆者の確信に近い思いがある。

なお、安全面などの配慮からか、本研究の調査への協力に積極的な矯正管区や少年院が必ずしも多くなかったことを予め述べておきたい。

1.1 少年院の概要

少年院とは、「家庭裁判所から保護処分として送致された少年に対し、社会不適応の原因を除去し、健全な育成を図ることを目的として矯正教育を行う法務省所管の施設」²である。また、「16歳に満たない少年受刑者」³のうち、少年院における矯正教育により期待ができる少年（少年院収容受刑者）に対し、16歳に達するまでの間、矯正教育をおこなう施設」⁴である。

少年院では、少年の年齢や心身の状況により、初等少年院・中等少年院・特別少年院・医療少年院という四つの種類に分かれており、家庭裁判所において送致される種類が決定される。なお、少年院では、費用の面からも男女別の施設をもうけているが、医療少年院のみ例外とされている。

また、少年院では、早期改善の可能性が大きい少年を対象とした「一般短期処遇」、早期改善の可能性が大きく、開放処遇に適する少年を対象とした「特修短期処遇」⁵、短期処遇になじまない少年を対象とした「長期処遇」、という少年の非行の進み具合に応じた三つの処遇区分

¹ 福島、1994年、80ページ

² 法務省矯正局『希望を胸に——少年院のしおり』、1ページによる。

³ 少年法等の一部改正（平成13年）により、16歳未満の少年受刑者が収容対象者となった。また、平成19年の少年法の一部改正により、収容対象年齢がおおむね12歳以上に引き下げられた。

⁴ 法務省矯正局、『希望を胸に——少年院のしおり』、1ページ

⁵ 平成3年に「交通短期処遇」は「特修短期処遇」に改編された。

に分けられている。そして、その処遇区分のもとに教育の必要性に応じて処遇過程を設けている。以下、その処遇過程の内容を処遇期間とともに概説しておく。一般短期処遇では、「短期教科教育課程」、「短期生活訓練課程」という処遇過程が設けられており、収容期間6ヶ月以内である。特修短期処遇では、収容期間4ヶ月以内という短い期間、開放処遇であるため処遇過程は設けられていない。長期処遇においては、多くの処遇過程が設けられており、「生活訓練課程」、「職業能力開発課程」、「教科教育課程」、「特殊教育課程」、「医療措置課程」である。収容期間は、2年以内であるが、必要と認めた場合は、例外もある。

少年院の教育活動としては、生活指導、職業補導、教科教育、保健・体育、特別活動の五つの指導領域がある。教育活動は、この五領域から成り立ち、その他にも、各少年院のオリジナルの教育活動がおこなわれている。そして、各少年院では「入院してくる少年一人ひとりの個性や必要性に応じて、家庭裁判所や少年鑑別所の情報や意見などを参考にして個別的処遇計画を作成し、きめ細かい教育を実施」⁶している。⁷

1.2 愛知少年院の概要

1.2.1 愛知少年院設立までの過程

愛知少年院は、愛知県豊田市浄水町にあり、最寄りの名鉄豊田線「浄水駅」から徒歩10分程度で到着できる都会の少年院である。少年院の2階中央部には、少年院の子どもたちが作った作品と共に、神風特攻隊員⁸について記載された新聞記事や遺品など、神風特攻隊に関する資料が展示されていた。

愛知少年院が設立されるまでの過程は次の通りである。旧海軍名古屋航空隊の一部が昭和

23年5月に法務省に所管換えとなったことから少年刑務所の設置作業が開始された。翌年6月に愛知少年刑務所が設置され、特別少年院も併設することとなった。昭和28年4月には、愛知少年刑務所廃庁により、愛知少年院として独立することになる。昭和52年3月に中等少年院の併設、生活指導課程をおこなう施設となった。昭和58年5月の施設全体の改築工事竣工、平成5年より、生活訓練課程、職業能力開発課程が設置された。平成25年1月には、特別少年院の収容停止、同年6月には、生活訓練課程、特殊教育課程をおこなう施設となった。

1.2.2 愛知少年院での生活スケジュール

愛知少年院では、家庭裁判所の審判を受け、少年院送致が決まった16歳以上20歳未満の少年を収容している⁹。入院後の一日の標準的な生活の流れは次のようなものである。7時起床・洗面・清掃、7時30分朝食、その後休憩、8時30分から課題読書、9時朝礼後教育活動、正午に昼食、その後休憩、13時より教育活動、16時から身辺整理・学習・珠算、17時30分夕食、休憩、18時30分内省、日記記入、19時30分から21時までテレビ視聴、学習その後就寝となる。

入院から出院までの過程は、新入時教育約2ヶ月¹⁰、中間期教育約6～7ヶ月¹¹、出院準備教育約3ヶ月¹²となる。なお、期間はあくまでも基本期間（約1年間）であり、長期（2年以上）に及ぶ場合もある。

1.2.3 愛知少年院における矯正教育

少年院では、社会不適応の原因を除去し、社会生活に適応できる健全な少年を育成することを目的に、生活面の指導、教育活動として生活指導や職業補導、教科教育、保健体育、特別活

⁶ 法務省矯正局、『希望を胸に——少年院のしおり』、3ページ

⁷ 1.1少年院の概要は、法務省矯正局『希望を胸に——少年院のしおり』をもとに作成した。

⁸ 愛知少年院は、戦争時代、旧海軍名古屋航空隊基地であり、昭和20年4月には、この地から、神風特攻隊（草なぎ隊）が沖縄に向け出撃した。その当時、桜が植樹され、現在も少年院で見事な花を咲かせている。また、少年院の入り口から2～3分程度の所には、地域の住民によってつくられた神社があり、そこで特攻隊員の霊をなぐさめている。

⁹ 20歳未満となっているが、成人しても1年間は少年とみなされるため、20歳を超えているものもいる。

¹⁰ 個室にて行動やマナーを学ぶ。

¹¹ 実習活動を中心におこなう。

¹² 社会復帰のための学び。

動を中心とした矯正教育がおこなわれる。その中でも、愛知少年院では、生活指導と職業補導を大きな柱とし指導している。

生活面においては、規則正しい生活の指導以外にも、寮舎内にて小動物を飼育することで命の大切さを自覚させる指導をおこなっている。愛知少年院次長・法務教官 山本善博は、その理由を、「寮舎内では熱帯魚、ハムスターなどの小動物を飼っており、世話をおこなうことで優しさを身につけさせたり、また、これらの動物が死を迎えることで、悲しさを体験することにつながっている」と述べている¹³。愛知少年院では生命犯¹⁴が多いこともあって、奪われた命を悲しむ人の気持ちを付度できるような情操教育を、自ら行う動物飼育を通して、実施しているということであろう。

教育活動としては、生活指導は、集団行動訓練、全体朝礼、SST（社会適応訓練）、問題群別指導、情操講座、暴力排除講座、面接指導、パートナードッグの項目を設けており、職業補導では、園芸科、農芸科、陶芸科、和紙工芸科、溶接科、玉かけ・小型移動式クレーン、フォークリフト、小型車両系建設機械の項目を設けている¹⁵。教育活動の一部を次に紹介する。

SSTの授業は、「ダイナミックスペース（動的空間）」と呼ばれる教室で実施され、ロールプレイングを用いた、実際に体を動かした中で学ぶ、参加体験型学習である。つぎに、陶芸科、和紙工芸科の授業である。両者共に似通った部分もあるが、陶芸と和紙作りの違いは、山本によると、「陶芸は、一人でできるので職人のような感じであり、集中力を養成できる」、「和紙は、分業であり、一人でなしとげることはいできない。これは、システムの中での生活に似ており、和紙を仕上げることを通して、社会性を学ぶことができる。」とのことであった。また、他の講座に関しても、「モノをつくることで価値あるものを生みだすことができる。それは、やりとげた、という達成感につながる」。また、「社会について学ぶことで、出所した後でも、



図1 愛知少年院・矯正の志魂の碑
(2013.09.24, 筆者撮影)



図2 愛知少年院・正門前
(2013.09.24, 筆者撮影)

悪い友達からの残音を省くことにつながる。」とのことであった¹⁶。

2. 更生支援パートナードッグプログラム

「更生支援パートナードッグプログラム¹⁷」は、「『動物が人に与える効果』に着目して、少年院の教育活動に『犬の飼育』や『犬と触れ合う機会』を取り入れるもので、被収容少年の気持ちを癒し、心情の安定を図ることで、少年院での生活に対して意欲を喚起し、持続させること、またこうした活動を通じて、生命の尊さや

¹³ 後述の2013年9月24日に筆者が行ったヒアリング調査への回答による。

¹⁴ 被害者の生命にかかわる非行を犯した少年のことをいう。

¹⁵ 少年院内の掲示看板を参照した。なお、SSTとは、正式名が書かれていなかったが、Social Skill Trainingの略であると思われる。

¹⁶ 1.2愛知少年院の概要（1.2.1、1.2.2、1.2.3）は、愛知少年院『躍進……施設のしおり』をもとに作成した。

¹⁷ 『『更生支援パートナードッグ計画』の実施（試行）について』（法務省矯正第5739号矯正局長通知、平成16年11月15日付）に基づき実施されている。なお、更生支援パートナードッグプログラムは法務省の予算措置がとられており、予算措置が取られている施設としては、愛知少年院以外にも、榛名女子学園および関東医療少年院がある。

相手の気持ちを理解しようとする気持ちを育み、少年の持つ問題性の改善を図ることを目的として施行されたものである」、また、「犬の飼養などについて外部の専門家を指導員として招へいし、専門的な指導を受けること」が義務付けられている¹⁸。

また、このプログラムは、教育活動内の生活指導の中に分類され出院準備教育期間の最終期間に行われる。このプログラムを受講する収容者は、月間5～6名であり、4～5人の集団で受講するグループと、1人の個別指導のグループに分けられている。グループごとに月1回の参加、一回の授業は約90分となる。出院までに、院生たちは、約3～4回プログラムにかかわることになる。

2.1 調査の概要

筆者が愛知少年院に対して現地調査および聞き取り調査の依頼をしたところ、その内容について同少年院関係職員が内部協議した結果、調査への協力が合意された。なお、筆者の調査の窓口となった担当者は、庶務課長の太田修二であった。

現地調査、聞き取り調査日は、2013年9月24日に行った。聞き取り調査¹⁹および現地調査に対応した職員は、愛知少年院次長・法務教官の山本善博（以後、山本と呼ぶ）であった。また、筆者は、プログラム実施の現場にも立ち会うことができた。そこで観察した状況をエスノグラフィー²⁰の形式で以下記述することにした。また、プログラム終了後、山本の計らいで、愛知少年院から委託を受けたドッグトレーナー（犬訓練士）の山越哲生（以後、山越と呼ぶ）にも、聞き取り調査²¹をおこなうことができた。

調査に際して許可されたのは、次長室での山本との会話の録音、少年院玄関からの写真撮影のみである。施設内へ持込みが認められたのは、最低限度の筆記用具、フィールドノート²²、お

よびストップウォッチであった。施設内での写真撮影、録音などは一切禁止との申し合わせにより、観察した内容は筆者が全てフィールドノートに記入するにとどめた。なお、記述する内容は、できるだけ忠実に記録することを心掛けたが、筆記での記入という方法であったため、会話やプログラムの進行の速さによって会話内容などを一部省略せざるをえなかった部分があることをあらかじめ断っておきたい。

2.2 愛知少年院犬「幸」

まず、プログラムに参加した犬について紹介する。プログラムに用いる犬については、愛知保健所にその当時の少年院の担当者と山越が視察に行き、保護されていた犬のうちおとなしそうな子犬を選んで飼育することが決まった。貰い受けた当初は、その犬は、推定2ヶ月ぐらいであり、初期の頃は、山越の自宅で生活し、毎週少年院に通わせることで、犬の社会化のトレーニングをおこなった。また、その犬を今でも、年に1～2回程度——夏休み・正月休み期間中が多い——山越の自宅に連れ帰り、2週間程度滞在させることで、家庭のぬくもりを体験させる学習トレーニングをおこなっているという。

その犬の名前は、幸（こう、オス、推定8歳〈調査当時〉）である。体毛は白色であり、柴犬のような日本犬である。誕生日を2005年1月1日と仮定した。幸の飼育場所は少年院施設内で、放し飼いの状態での飼育をしている。幸はいつも、楽しく走り回っているようであった。そして、幸は職員の事務所で寝ていたり、朝晩の給餌時以外は自由にしているのであるが、いつも職員のそばにいて、職員の癒やしにもなっているという。職員たちも、躰け上よくないと分かっている、ついつい幸にオヤツをやってしまうことがあるそうで、職員にとっても幸は愛玩の対象になっていることが伺えた。

¹⁸ 宮川・高山、2013年、26ページ

¹⁹ 聞き取り調査は半構造化方式で行った。この方式は、調査前に質問内容がある程度決めておくが、回答者の答えによりさらに詳しく質問をするという特徴を持つ。なお、今回の調査における構造化の部分は、犬の導入の経緯、名前、性別、プログラムの内容、プログラム実施後の生徒の変化などである。

²⁰ 現地調査で参与観察した内容をストーリー形式で記述。

²¹ 非構造化インタビューは、調査前に質問内容を定めず、質問時に自由に質問内容を構成する方法である。

²² 調査記録を記すためのノート。

2.3 プログラムの内容

プログラムの内容は、①犬と人間のかかわり、②犬の学習、③犬の問題解決方法、および④犬の身になってみる、という4パターンである。そして、山越によると、どの講座から開始しても良いように、すべて一回完結となっている。そして、どの講座においても、生命尊重の教育の話ができるように工夫をしているという。なお、講座中は、教官ではなく山越が院生たちを指導監督することになるが、山越は「犬の専門家としての役割を逸脱せず進めることができるように配慮している。」とのことであった。

また、これ以外にも山越が意識して行っていることがある。それは、第一に、問題行動の解決には罰を使わないこと、および学習をすることで効果が上がることを実例を示して証明してみせるということである。第二に、自分の気持ちだけで行動するのではなく、相手がどう思っているかを考える方法として、クリッカーゲーム²³を用いる幸との遊びを通して自然に学びとれるようにしていることである。

今回筆者が参加したのは、集団グループであり、参加人数は3人である。基本的にこのプログラムは13時開始であるが、教室への移動や、点呼などもあり、実際に開始されたのは、13時14分からである。

次いで、愛知少年院でおこなわれた「更生支援パートナー犬」の詳細について述べる。

2.4 プログラムの実際

2.4.1 入室、授業開始

院生たちは、数人の教官につれられ、13時5分位に、教室に入室した。続いて、パートナー犬の幸と山越、筆者、山本も入室した（院生たち、担当教官が入室後に幸を先頭に入室。順番は入室順）。担当教官が全員の入室を確認したあと、数人の教官が退出し、外から鍵を施錠した。部屋の中には、院生3人と、担当教官一人、山本、山越、幸、筆者となった。そして、授業を開始できるように、院生たちが机の配置

を少し変更した。

院生たちは、一番前の席に横一列に並んで座り、そのすぐ後ろ左側に、一人の担当教官が座り、山越は院生たちの前のホワイトボード横の席に座った。筆者は、山本の指示のもと、院生たちからかなり離れた教室の一番後ろの場所の椅子に腰をかけ観察を行うことになった。山本は、筆者のすぐ後ろ右側に座った。幸はリード（引き綱）をはなされ、自由に走り回っていた。一度、全員が席に座った後、改めて起立、礼の掛け声と共に開始の合図がなされた。なお、今後、少年の背後左側をA少年、中央をB少年、右側をC少年とする。今回のプログラムの参加に関して、A少年は二度体験したことがあり、今回が三回目の体験である。B少年、C少年は、はじめての体験であった。

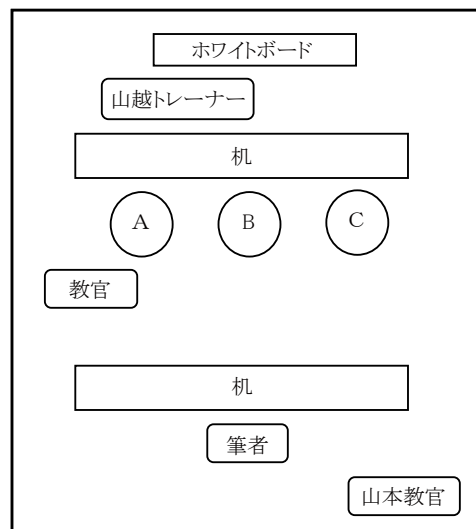


図3 最初の配置図

(筆者作成)

1分後、山越が知っている犬の種類について院生たちに尋ねた。それについて、院生たちが「ミニチュアダックス、マルチーズ、チワワ」などと答えている。筆者には、答えている院生たちの表情を見ることが遠くて分かりづらく、また、院生たちの声が小さく聞こえにくかった

²³ クリッカーゲーム（クリッカートレーニング）とは、手の中にすっぽりと納まるクリッカーと呼ばれる道具を用い、罰をあたえない行動強化のトレーニングである。クリッカーは押すと「かちっ」という独特な音がする。

ので、山本に依頼をし、院生たちのすぐ後ろの席に移動させてもらった。なお、山本は、筆者のすぐ後ろ、左側に座った。

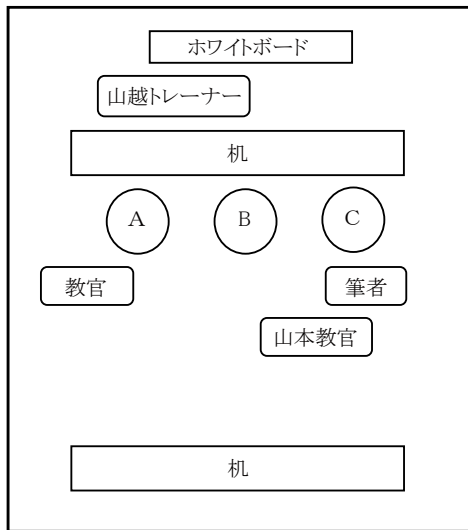


図4 変更後の配置図

(筆者作成)

筆者、山本が席を移動した後、犬の種類についての話は終了し、山越がホワイトボードに「1. 犬について知る」と記入した。書き終わると、ブラッシングの話となる。山越が「ブラシは別名スリッカーともいう。知ってるかな?」と話した。山越が、ブラシをもち、幸を呼んで、ブラシの仕方を、実演を交えながら説明する。幸に向かって、山越が「幸は、ブラッシングは好きではないけど、オヤツをもらえるからよいか〜」、と言いブラッシングするたびにオヤツを与える。今後は、幸が少し嫌がると、山越が「嫌なときはやらないけど（ブラッシングしないということ²⁴）、お菓子はあげない。」、と生徒に説明をする。次に、生徒に対して、山越が「日本犬は、おしり（をブラッシングされるのが）がきらい」と教える。幸と生徒に向かって、山越が「こんだけ毛が抜けているので、（ほっておいたら）えらいことになるよね」などと話し、終わりに幸にオヤツをあげ実演は終了となる。

次は、挙手でブラッシング担当とオヤツあげの担当を決めることになり、A少年とC少年が手を挙げた。よって、順番におこなうこととなり、A少年がブラッシング担当、B少年がオヤツ担当となる。時間は13時21分である。二人とも立ち上がりホワイトボードの所に行く。そのとき、山越は「おやつは、飼い主さんが『はい』とってからあげる」と説明していた。すぐに、A少年によるトリミングがスタートされた。C少年が「ケツは嫌いなんですか?」とたずね、山越が「日本犬はねえ、結構お腹の下も嫌がる」と教え、B少年が「どんな犬でも嫌がるの?」とボソッとつぶやいた。山越は「ほとんどねえ」と会話をしながら、ブラッシングは進んでいた。それから、山越の指導により、B少年が、犬を立たせ（四つん這いの状態）、オヤツをあげる。つぎに、山越が「気持ちいいからゆっくり尻尾を振ってる」と、犬の尻尾について簡単に説明した後、B少年がブラッシング、C少年がオヤツ担当に入れ替わる。改めて、ブラッシングの開始である。B少年は、言葉をかけることもなく顔も無表情であったが、ブラッシングしているその手は優しかった。山越が「だいぶ綺麗になったね。そろそろ、『そう』って言ってあげて（オヤツをあげて）」とC少年に促した。C少年は、小さな声で「そう」、といいオヤツをあげる。そのそばで、山越が床に落ちた幸の毛を袋に入れていた。そして、B少年に「首のあたりも（ブラッシング）してあげて」と話した。C少年が再び「そう」と言い、オヤツをあげる。もう一つあげようとしたとき、オヤツを一つ床に落としてしまい、そのとき一瞬「あっ」と言った。とっさに、山越がC少年に「『そう』と言わなければ食べないからそのままにしてて。」と言った。幸は、しっかりと訓練されているので、落としたおやつは食べなかった。C少年は落としたおやつを拾い、「そう」と声をかけ、オヤツをあげる。13時26分40秒に、担当が変わり、C少年がブラッシング、A少年がオヤツ担当になり開始となる。C少年がブラッシングしていると、山越が「首をもっとガリガリしてあげて!奥までしっかりしてあげて。」、と声をかけた。C少年は優しくそして

²⁴ 会話内の括弧は、筆者が分かりやすいように付け加えた。以後同じ。

丁寧にブラッシングを継続した。途中、A少年が「そう」と言い、オヤツをあげる。そのときの、C少年は、幸を見ながら微笑んでいた。また、A少年が、そっと幸に触れていた。つぎは、ブラッシングしているC少年が「そう」と言い、A少年がオヤツをあげた。そのとき、3少年とも幸が歩いた方に目を向け、微笑んでいた。とくに印象的であったのが、B少年である。

ブラッシングが終了すると、犬の皮膚と毛について、山越がホワイトボードに絵を描き、説明が始まる。まず、「主毛、副毛、脂腺、アポクリン腺、エクリン腺」などの説明である。このときの様子は、A少年が幸に目をやっていた。さらに、山越が質問と説明をしながら授業を進める。山越が「なぜ、汗をかくの?」と院生たちに質問すると、A少年が「熱を逃がすため」と答え、山越が次に「体温調節って何です?」と院生たちに問いかけ、院生たちの答えを聞く前に人間のことについて簡単に説明後、山越が再び「犬って、どうやって体温調節すると思う?」と院生たちに質問した。C少年が「息」と答え、山越が「ハアハア言うね」と言い、犬の汗の説明をした。

そして、次の質問を山越はした。「(犬が)塩辛いものを食べたらかんとか、聞いたことある?」と山越が質問し、B少年が「魚介類とか、あかんって聞く。」と答えたのである。しかめっ面をし、積極的に参加していない様子であったB少年が、自分から答えたときは、筆者は少し驚いた。山越が再び主毛の説明を、院生たちの机に幸の毛をおいて始めた。山越が「なにか他に、手入れってあった?」と別の質問をする。A少年が「爪切り」と答え、山越が「犬の爪は、人間と違って、かぎ爪になっている」、と爪の説明を始めた。その後、山越は「はい、爪切りをしますか?」と院生たちに問いかけ、ギロチン式の爪切りをみせ、そして、ABC少年に交代で実際に爪切りを持たせ、爪切りの仕方を説明し始めた。幸はというと、ブラッシングが終わってから、筆者の足回りや院生たちの足回りをウロウロしていたが、山越に呼ばれたことで、即座に山越の前に走って行った。山越は幸を抱き、爪の切り方を実演して見せた。そのとき、山越は幸に向かって、「情けない顔してるなあ。」、次に院生たちに向かって、「情けない顔してるやろ?」と言うと、院生たちは、少し声を出し

て笑った。A少年が「どの犬も(爪切りは嫌い)ですか?」と問いかけてきた。山越が「うん。だいたい。」と答えた。C少年が突然立ち、前に出て爪切りの現場を間近に見にやってきた。A、B少年は、椅子に座ってみている。

それから、山越が幸にオヤツをあげた。突然A少年が、「(人間がそのおやつ)食べても大丈夫なんですか?」と声をかけてきた。それを聞いて、B、C少年が笑った。筆者が推測するに、その笑い方は、幸が食べている姿があまりにも美味しそうで、味見したいと思った自分の気持ちと同じだったと感じたからではなかろうか。実際、筆者も同じであり、A少年の言葉を聞いたとき、クスッと笑ってしまった。また、幸の真ん前で爪切りを見ているC少年が間髪入れず、「猫缶って意外と美味しいです」と話した。そして、皆が笑った。

山越は、爪切りをしながら「信頼関係を維持するためには、無理やり嫌なことをしない。」「あまり嫌がるようなら、爪切りを無理やりしない。」と話し、話し終えたタイミングにC少年が、「猫って(嫌がっても爪切らなかったら)ガリガリするけど…」と言いながら自分の席に戻った。その後も、山越による実演の爪切りは続き、まず、A少年が、覗き込み、つぎに、B少年は「(どこら辺を切ったら良いのか)わからない」とつぶやいた。

山越が幸の前脚の爪をすべて切り終わると、「爪切ってみる」、と院生たちに声をかけた。すると、C少年が立ち上がり、幸のもと(前)に行った。すぐにC少年による爪切りが開始された。幸のもとに屈み、後脚の爪を切り始めた。そのとき、C少年が思い切りよく幸の爪を切ったのだ。それは、血管スレスレのところであった。B少年が、「がっつりやー!」と言ったこともあり、山越、院生たち、担当教官、山本、筆者も一瞬大爆笑となった。

ある程度爪を切り終えたC少年は、幸にオヤツをあげ席に戻った。幸を抱きかかえ山越が残りの爪を切る。その途中、B少年が「血でたらどうなるんですか?」とたずねた。山越は、「痛い」、「クイックストップ(動物用の血止めの薬であり、黄色の粉末タイプになっている)っというのがあるけど、それをつけたらすぐ止まる。」「自分でも試してみたけど、血が出るより、その薬塗ったほうが余計痛くなる。」「でも、

ドッグショーの人は、血が出ても平気で切ってる。」と幸の爪を切りながら話していた。

まもなく山越は幸のすべての爪を切り終えた。そして、山越が「ほか何かある？」と質問した。A、B少年が同時に「歯磨き」、A少年が「歯石とり」と答えた。山越が、抱いている幸の手を握ったり離したりしながら、「前脚の手を握ったり、離したりすると逃げる（逃げようとする）やろー」と話した。すると、B少年が「僕の犬もそうする」と答えた。つぎから歯の掃除が開始され、それと同時に、犬歯や奥歯などの歯の説明がおこなわれた。山越が「歯ぐきは、当てないようにしてるけど、ときたま、あてる」と言う、3人の院生たちも軽く笑い、掃除途中、山越が「あ、ちょっと当てた」と言う、院生たちは、さっきよりも笑った。歯の掃除が終了し、山越がオヤツをあげてから、幸を解放した。

次からは、新しい質問となり、山越が「(犬の) ガムの素材って何でできているか、知ってる？」と問いかけた。そして、犬のガムをA少年から順にさわってもらう。はじめに、B少年が「グミ」と答え、次にC少年が「ゼラチン」、「牛の皮」と答えたところで、山越が「正解」と答えた。それから、C少年が幸に「おすわり」と声をかけ、ガムを渡した。すると、C少年に対し山越が「ガム持ってきてもらって、オヤツと交換して。」と言い、C少年も「幸、ガム持ってきて。」と声をかけると、すぐに幸はやってきた。オヤツを見せると、幸はそのガムを下に落とし、それをC少年が拾い、そしてオヤツをあげ、また先ほどのガムを渡した。つぎは、山越が新たな課題をC少年に出し、C少年が先ほど渡したガムを指さして「ガム頂戴。」と言って手を差し出すと、幸が、C少年の手にガムを渡した。C少年が幸にオヤツをあげ、そして、幸がC少年にそのガムを渡し、終了となった。その後、そのガムは、幸によっておいしく食べられた。

ての説明がはじまった。山越がホワイトボードに簡略された世界地図を書き、山越が「犬の発祥を丸つけて。」、「人間はどこか知っている？」と問う。C少年は、左を指さし「ヨーロッパ!」と答えると、山越が「ちょっとちがう。」と言い、説明をした。その説明を3人の院生たちがノートにメモをとる。次の質問を山越が「動物（の種類）を言って。」と言い、山越がまず一つ「家畜」と答え、それに続いて、C少年が「牛」、B少年が「ブタ」、C少年が「ニワトリ」、A少年が「馬」、そして、最後に山越が「あとは、犬と猫かな。」と答えた。それから、山越が、ロシアの銀ぎつねの研究²⁵の話をした後、山越が「犬と暮らすメリットって？」と質問をし、C少年が「猟につれていく。」、A少年が「暖かい。」、C少年が「他の敵を見つける。」などと院生たちに問いかけ答えを引き出し会話しながら山越は説明をしていった。そのときの、教室の配置は次の図のようなものである。

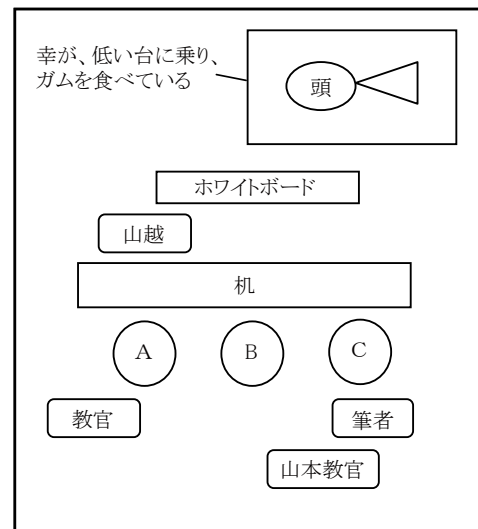


図5 「幸」を交えた配置図

(筆者作成)

2.4.2 信頼、コミュニケーション

あらためて、ホワイトボードでの授業となり、「1. 犬について知る (1) 犬の歴史」につい

14時09分49秒から、新しい質問になり、山越が「帰ったら、家の人に犬吠える?」と聞き、B少年が「吠えない」と答え、山越が「他人やったら?」とまた聞き、B少年が「吠える。」と答え、

²⁵ ロシアで1962年に開始された研究で、子どもが生まれるたびにキツネの子どもを人間と接触させ、家畜化できる個体を選び、さらに交配させ、人間をおそれないキツネをうみだそうとした。約4年後人間と積極的に触れ合うキツネが誕生したことで家畜化が成功したのである。そして、そのキツネは外見までも変化し、ペットの犬のように変わりつつあった。

山越が「それは、何でやろー」とさらに質問し、B少年が「(家族とは)ながく一緒にいるから(吠えない)。」と答えた後、犬が吠えるか吠えないかの説明を山越はおこなった。それを、C少年がノートにとっていた。ホワイトボードに書かれていたのは、以下のようなものである。

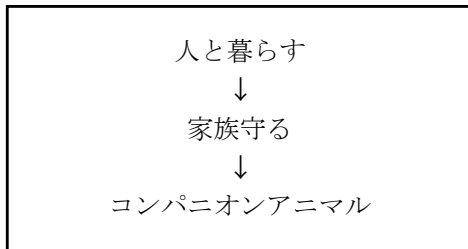


図6 板書内容①

つぎに、山越が「使役犬って(何がいる)」と話し、A少年が「盲導犬」、B少年が「警察犬」、C少年が「麻薬犬」と答え、山越が「そうやね。」と話した。今度は院生たちではなく、院生たちの背後左端に座っている教官に山越が次のように問いかけた。「(幸は)少し癒しになっていますか?」と。教官が笑顔で声のトーンをあげ、「はい、なっています。」と答えた。山越が「ということは、使役犬プラスコンパニオンアニマルになっていますね。」と答え、教官が「はい、もちろん。」とのことであった。

ホワイトボードに「(2) 人と犬の関係づくり」と山越が記入した。幸はといえば、ガムを食べ終え、歩き始めた。そして、A少年のところに近寄って行った。すると、A少年が、説明を聞きながら、首をさわりだした。少しさわってもらった幸は、また、ふらふらと歩きだし、それを、A少年が、幸が歩いているところを目で追っていた。

また、C少年も幸が歩いていくところを目で追っていた。山越は、先ほどの授業を進行しており、山越が「犬って集団作る?」と話し、B少年が「群れ?」と答えた後、山越が犬の集団についての説明をした。その最中も、幸はウロウロとしており、筆者の足元に来て鼻をつけたりしていた。

ちょうど、C少年の机の前の方に幸が寄って行って座ったので、C少年が机の上から手を伸ばし、少し腰をあげて幸の頭をさわった。

同じ時期に、山越の犬の集団の話が終わり、つぎは、イヌ科についての説明に変わっていく。C少年はというと、幸の頭をさわりながら、山越を見ていた。

それから、山越が「イヌ科って何いてる?」との質問に、C少年が「ハイエナ。」と答えた。また、幸が動きだし、ちょうど、C少年の机の真下、足元に寄ってきた。C少年は、今度は机の下で幸のお腹をさわり、背中、おなか、背中というように交互にさわっていた。C少年は、幸が座りやすいように、自分の足を少し広げ、幸が寄りかかりやすいように配慮していた。

その後、四つん這いでたっていた幸が、C少年の足に寄りかかるように座ったので、C少年は、お腹をさわるのをやめ、背中をなでていた。暫くの間、なでてもらいリラックスした幸が、動きだし、ホワイトボードに向かって右側の窓あたりに行き座った。またすぐに幸は動きだし、そのときに、山越に呼ばれ、幸は山越のもとに行った。そして、山越が幸をさわり、「(幸は)こうすると嫌がる、何故やと思う?」と院生たちに問い、C少年が「かかえられるから。」と答え、山越が「うん、いろいろあるけど。」と答え、犬のさわり方、かき方(なで方)の説明になった。そのとき、ABC少年とも幸に集中し、幸のことを目で追っていた。このとき、ホワイトボードの板書内容は、以下のようなものであった。

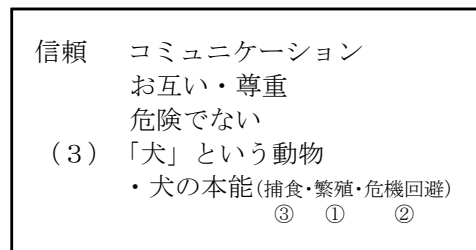


図7 板書内容②

その間も、幸は、ウロウロしており、筆者の足元で寝たり、筆者に「さわってさわって。」の合図をしたり、教官のもとにいったりと自由にしていた。そして、A少年の机の前の方に幸が行ったことで、A少年は、机の上から前のめりになって手を出して幸をさわった。幸はさわられてから9秒後に、歩きだし、A少年はそれ

を目で追っていた。

次は、C少年の足元にゆっくりと寄って行った。C少年は机の下の手をなでていた。その間も、山越の説明は続いており、院生たちは、ホワイトボードを見ていた。14時31分46秒からは、手の平を見せ、去勢の説明がおこなわれた。その説明を聞きながら、院生たちは、口々に「かわいいそう。」と言っていた。説明をし終え、ホワイトボードに山越が「ボディサイン」と記入した。さらに、山越が用意していた犬の写真を3つ見せ、院生たちにさわっても良いものを見つけてもらうように促した。「どれ、さわっても大丈夫?」と山越が質問した。院生たちはその写真を真剣に眺めていた。

2.4.3 ボディサインを読み取る

考えているからか、院生たちは、4分程度、沈黙となる。その間も、山越が「どうかなあ」や、「ゆっくり見て考えて」、「何でもいいよ。思ったこと言って」などの声をかけていた。その間の、院生たちの様子は、というと、手が歩いていたので、A少年が、左太ももあたりで、左手をふって、手に「おいでおいで」のサインをした。それをキャッチした手は、A少年の左背後に近づいて、止まった。手は少年から少し離れたところに座った。

A少年が手を左後ろに伸ばし、手をなでた。なでられた手は、すぐに後方に動き出し、また戻るかのようになり、A少年とB少年の椅子の間に歩いてきて座った。A少年もB少年も、顔は、ホワイトボードを見たまま、手を共になでていた。また、手が動き出し、今度は、C少年の足元に寄っていき、四つん這いの状態のまま静止した。C少年は、抱えるように両手で手をさわっていた。B少年も、少しC少年の足元に手を伸ばし、手を右手でさわった。

またも手が動き、A少年とB少年の椅子の間に座ったことで、A少年が右手、B少年が左手で手をなでていた。その後、B少年が、なでるのをやめると、手が動き出し、A少年もさわるのをやめた。約4分間の間、山越が見せる写真を見、説明を聞きながらの状態であった。

それから、続いていた沈黙を打ち消すかのようになり、山越が「この写真見て、犬どう思う?」と質問をした。B少年の答えは「さ

わって見て」であり、C少年は「気持ちいい」であった。山越が「気持ち良さようやもんなあ」と答えた。それに関連し、尻尾の説明をし、それを聞いていたC少年が、ノートにメモを取り出した。

そして、また別の写真を見せ、山越が「これはどう?」、と問いかけ、A少年が「つまらない。」、B少年が「嫌がってる。」と答えた。山越が「ちょっと違うな、これは、威嚇してるわ。」と説明する。山越が子どもたちに次の写真を見せ、「これはどう、怖がってる?、どんなボディサイン?」と問いかけ、B少年が「怖がってる、ガンミ。」と答え、山越が「よく目をみて。」と言ってから目についての説明をし、その次に、「この人変なんちゃう。なんかされそうやから寄らんとこう、とあやしがってるで。」と教えた。それを聞いたB少年は、山越の言葉がおもしろかったのか、顔をゆがめて笑い出した。それからというもの、山越によるボディランゲージの話の聞くたびに、B少年は笑っており、ついに、B少年は「はあ」と声を出して笑った。A少年も、B少年も笑顔で話を聞いていた。そのとき、しっかりと覚えておこうと思ったのであろう、C少年が、真剣にメモをとっていた。それから、山越がホワイトボードに、「感情」、「行動」と記入した。この間の手はというと、筆者の足元で、筆者の足を枕に眠りにふけていた。

14時44分19秒、山越が手を呼び、山越の横に来よう指示をしたのだが、手は、きちんと側に寄らず、もう一度、指示を出された。3少年とも、その姿を見て少し笑っていた。その後もきちんと足の横につくことができなかったため、何度も何度も指示を出されていたのであるが、その姿は愛らしく、C少年が、がんばれの気持ちをこめたかのように、笑い出した。何度も何度も指示を出され、B少年は、手のことを不憫に思ったのか、その指示を止めるかのように、「あの、教え方はどうしたら良いんですか?」と山越に声をかけ、手に対するその指示をストップさせた。

その質問をうけ、山越がトレーニングの説明を始めた。教え方は手を使って実演を交えたものであるが、山越が「手、はいオヤツ、どうぞ」や、「手、はいオヤツ、あげない」などのトレーニングから始まり、それを聞いたB少年は、うなずき、そして笑っていた。その後も、

B少年はうなずく、笑う、を繰り返していた。なお、B少年だけを見た場合、14時46分20秒、うなずく。同時刻40秒、笑うであった。14時47分07秒には、A少年は少し笑い、B少年は、満面の笑みを浮かべ笑っていた。また、C少年も良い笑顔で笑っていた。

再び、幸を足の側につけるトレーニングをすることになり、C少年から始めることとなった。幸はC少年の横にはすぐにきて側につき、側歩²⁶の練習が開始された。一緒に歩いているC少年の笑顔は、すごく笑顔であり、楽しそうであった。約1分後には、C少年は、こぼれんばかりの笑顔に変化していた。そして、C少年は、終了となる。

つぎに、山越が、幸に「バーン、きおつけ。」と指示をし、幸がそのたびに、グローンと寝ころび、再び、もとの姿勢に戻りと実演をした。選手は交代し、B少年のトレーニングが開始された。そのとき、B少年が山越に「左でしたっけ?」と確認し、幸を呼んだのであるが、幸は失敗し、その姿を見ていたC少年が、幸に向かって「ばかじゃない。」と言って笑ったことで、山越は「ばかじゃない。犬はかしこい。幸も頑張ってるし、すごくかしこい。」と答え、C少年が「幸、ごめん。」と言ったところで、幸もB少年の左足側面にしっかりくっつき、歩き出した。B少年は、終始笑顔で、幸の顔を見、幸の速度に合わせ側歩のトレーニングをおこなった。時間的なこともあり、すぐに終了したが、B少年は、本当に心から笑っているかのような笑顔であった。幸をさわり、次のA少年に、バトンタッチした。それから、A少年の左足側面に幸がつき、笑顔で歩き始めた。そして、A少年終了である。

時間も押し迫ってきたことから、クリッカーを見せ、幸に実演したうえで、クリッカーの説明を簡単に始めた。C少年が、「鳴ると振り向くんですか?」と質問し、山越が「振り向かせる道具ではないんだけど。」と答え、C少年が「関連付けですか?」と質問し、山越が「そんなもんやねえ。オヤツの代わりにになるし。」と答え、終了時間が近づいた為、山越が「では、そろそろ時間だし、終わるね。」ということで、終

りの挨拶をした後、プログラムは終了となった。

その後、3人の院生たちが机や椅子を、最初の状態に戻した。その間も、幸が院生たちのもとに近寄っていくので、3人の院生たちとも両手で幸をさわり、非常に嬉しそうな表情を浮かべていた。片付けが終わったのを確認し、筆者が、「今日は、ありがとうございました。」と大きな声で声をかけ、院生たち3人がそれに応え、「ありがとうございました。」と返事をしてくれた。そして、院生たちは幸をそっと抱きしめさわりつつも、数人の教官が迎えに来たことで、名残惜しように教室を後にした。そのとき、幸はそれを見送るかのように院生たちを見ており、院生たち3人も幸に手を振って笑顔で退室していった。

2.5 プログラムを終えての変化

院生たちの表情の変化は、最初教室に入ったときと終わる直前では比較にならないくらい温和になっていたと観察できた。とくに、顕著であったのが、B少年である。B少年は、教室に入る前に廊下を行進しているときも、無表情であり、教室に入ってから笑顔ひとつ見せない、少し寂しそうな目をした少年であった。また、山越の授業の話を聞いていても、うなずくこともせず、ある一点を眺めているかのような雰囲気であった。そして、幸の毛をブラッシングするときでさえ、幸にもまったく声をかけようとしなかった。

しかし、筆者には、幸をブラッシングしているそのB少年の手の動きは非常にソフトで優しいものであると看取り、心の優しい少年であるという印象を持った。そんなB少年の心を察知したのか、幸が寄り添うことで、B少年が幸を撫で、少しずつではあるが緊張がときほぐれたことで、笑みを浮かべるようになってきた。このとき、幸とB少年の関係が、その場限りの関係、犬と少年院入所者ではなく、互いに信じあう、いわば“同志”のような関係になったのではないだろうか。後半2時44分19秒からは、山越の言葉に、うなずくことが多くなり、笑顔も多くなった。そして、その笑顔も、輝く

²⁶ 犬を左足側面につけて、人間の歩調に合わせて歩くトレーニングのことをいう。

表 1 プログラムの概要

【更生支援パートナードッグプログラムのスケジュール】 2013.09.24		
時 間		内 容
13:14:00	…	開始（起立→礼→着席）
13:15:00	…	山越氏より少年たちへの質問
13:18:00	…	「犬について知る」の授業が開始される ブラッシングの体験、オヤツをあげる体験
13:28:52	…	ブラッシング終了
13:29:30	…	犬の皮膚についての説明（ホワイトボードを使用）
13:33:57	…	主毛についての説明（幸の毛を見本として）
13:35:41	…	爪切りについての説明、実演 前脚の爪をすべて切る
13:43:48	…	爪切りの体験（C少年のみ） 後脚の爪を切る
13:45:14	…	C少年爪切り体験終了
13:46:51	…	爪切り全終了
13:48:56	…	歯の清掃実演、歯についての説明
13:51:44	…	歯の掃除終了
13:52:29	…	ガムの原料について考える
13:53:12	…	ガムを用いたデモンストレーション
13:56:38	…	「犬の歴史について」の授業が開始される（ホワイトボードを使用）
14:07:18	…	「人と暮らすメリットについて」の説明（ホワイトボードを使用）
14:10:08	…	「犬が吠えるか、吠えないかについて」の説明（ホワイトボードを使用）
14:13:26	…	「使役犬について」の説明
14:15:35	…	「人と犬の関係づくりについて」の説明（ホワイトボードを使用）
14:18:27	…	「イヌ科の動物について」の説明
14:24:25	…	「犬のさわり方、かき方」の実演、説明
14:31:46	…	「去勢について」の説明
14:33:35	…	「ボディサインについて（写真からの推測）」の授業
14:38:37	…	「ボディサイン（尻尾について）」の説明
14:39:27	…	「ボディサイン（目について）」の説明
14:45:12	…	「犬のトレーニング方法」の説明
14:47:38	…	側歩トレーニングの体験開始
14:49:20	…	幸のデモンストレーション
14:53:39	…	「クリッカーについて」の説明
14:55:32	…	授業終了（起立→礼）
14:56:35	…	後片付け
14:57:52	…	終了、退室

(著者作成)

ぐらしいスマイルであり、犬が空間にいることで、ここまで変化するのか、と驚いたほどの体験でもあった。

A 少年と、C 少年は、はじめは怖い顔をしていたが、幸を見て、なでた瞬間に、こわばった表情がときほぐれ、時間が増すごとに楽しそうに学んでいた。C 少年においては、ノートに山越が述べたことなどを真剣に書きとめ、知識を自分のものにしようとしていた。

3 人の院生たちとも、幸に触れながら熱心に授業を聞いており、幸も院生たちを、えこひいきすることがないように、平等に院生たちのもとを回っていた。犬は人の心を読める特性があるからであろうか。

そして、院生たちも幸を、むやみやたらに力強くさわるのではなく、幸が気持ち良いように、ゆっくり優しくさわっていた。頭であったり、お腹であったり、首であったり、と。そして、講義が終了し、後片付けも終わり、迎える教官が見えた瞬間、B 少年が座って幸をだきしめ、「幸、ありがとう。バイバイ」と小さな声で言ったとき、筆者はあまりの感動に泣きそうになった。参与観察者としての筆者にとっては数時間の体験であったが、この体験は B 少年の心に深く残り、動物であったとしても他者の気持ちを的確に察知し理解することができるようになったのではないかと感触を得た。それを見ていた C 少年も幸を軽く抱きしめ、幸の背中に頬ずりをした。何か幸に話していたと思うのであるが、それは聞こえなかった。A 少年も頭をそっとなで、幸に小さく手を振って「バイバイ」の合図をしながら、幸を優しい眼差しで見つめ心の中で語っているかのようにみえた。幸に感謝の言葉をかけていたのかもしれない。

3. 更生支援パートナー犬プログラムの考察

3.1 プロジェクト・プーチ

本調査に当たり、安全面の配慮から本調査への協力に同意したのが愛知少年院だけであつ

たため、今回の調査で得た所見の客観性を高めるためには、今後、調査数を増やすことが必要となる。しかし、海外で行われた同様の事例を参照することで、今回の調査結果と所見にある程度の客観性を付与することは可能であろう。そこで、プログラムの実施内容等が愛知少年院のものと異なる点はあるものの、アメリカのオレゴン州にある少年院「マクラーレン少年院」でも犬をもちいたプログラムが実施されているので、この事例を以下検討することにした。

このプログラムの名称は、「プロジェクト・プーチ (Project Pooch)」といい、「犬と共により良く変わっていこう」がスローガンとなっている。この Pooch という言葉であるが、「Positive Opportunities Obvious Change with Hounds」²⁷ の頭文字からとられた言葉であり、ドッグシェルターに保護された、野良犬や捨て犬を少年院で世話し基本的な躾のトレーニングを行ったうえで、再び新しい飼い主を探す、というものだ。少年院の収容者たちは、自尊観に乏しく自らの存在意義を見いだせない傾向にあるが、分け隔てなく少年たちの存在価値を認めてくれる犬とのかかわりの中で、命の大切さを学んでいくというのがこのプログラムの趣旨である。犬たちも、一度、人間に見捨てられ失った信頼を、子どもたちとのかかわりの中で取り戻していくという。つまり、院生と犬が互いに成長していくプログラムなのである。そして、その成果は、「プロジェクト・プーチで犬を愛し、犬と共にすごしたマクラーレン少年院の子どもたちはすでに百人をこすが、再犯を犯した者はただの一人としていない。」²⁸ という事実に見れている。

3.2 愛知少年院での事例の考察

現地調査の対象となった前記の授業で、パートナー・ドッグとの関わりの中で、3 人の院生たちにとって様々な学びが生まれたのではないかと筆者は考えた。竹内が述べるように、「人間社会で生きていくために、“自分”を作っていくという面において、動物はとても重要な存在となる」²⁹。さらに、メルスンが述べるように、「子どもたちは、動物界とのかかわりを通して、

²⁷ Project Pooch ホームページ (<http://www.pooch.org/>、2015 年 3 月 31 日確認)

²⁸ 今西、2003 年、153 ページ

²⁹ 竹内、1999 年、33 ページ

自分自身やこの世界における自分の場所について学ぶ」³⁰。また、犬は、院生の過去を見ない。時計の針を気にすることもなく、文句も言わずいやな顔ひとつせずに寄り添い、院生たちのネガティブな感情を受け入れてくれる。自分に付けられた社会からのレッテル通りの人間になるというラベリング理論の面から見ても、院生たちを見た目で判断することがない犬を介在したプログラムは矯正教育に必要であるとの見解を筆者は持つに至った。

その理由の一つが、子どもが、動物、とくに愛玩犬とふれ合うことの効果として、子どもたちの共感能力（感情移入）を育む支援³¹、認知能力の発達促進³²、言語能力向上の支援³³、情緒的な支え³⁴、心を素直に開くことができるサポートや非言語コミュニケーション発達の手助け³⁵等の報告の存在である。さらに、余語が述べるように、子どもたちにとって「動物との接触は、一方では言語の通じない相手の感情や意図を理解する能力や感受性を、他方では言語の通じない相手に自己の感情や意図を理解させる能力を高めるだろう」³⁶。

こうした所見に対しては、今回の調査での次のような観察結果によってもその妥当性を確かめることができたと思われる。第一は、ブラッシングやトレーニングをするときにも、院生たちは何度も幸を見、そして、幸を気遣い、優しい気持ちで接している姿を筆者が観察する中で見る事ができたことである。これにより、少なからず、院生たちは、他者のあたたかさ、他者は優しく接し愛情をかけるとそれに応えてくれること、他者を理解すること、非言語コミュニケーション³⁷を用いた感謝の気持ち、そして院生たち自身が、これからも頑張ろうと思う気

持ち、自分を理解し自分を知ることなどを感じとれたにちがいない。

第二に、幸とのお別れのときに院生たちが幸をギュッと抱きしめた行為に、短い間に犬と彼らとの間に築かれた親愛の感情の発現を見て取ることができたことである。院生3人とも最初は、山越の目を一切見なかったのだが、幸と触れてからというもの、山越の目をしっかり見、そして、山越の言葉に、うなずき反応し、笑いまでも共有していた。これは、幸がいる空間で、幸を「共視」³⁸することを通して山越、院生たちの互いの気持ちを交流させ、そして、素直な心を持ち、楽しく学べたことが院生たちの変化につながったことによるものではないだろうか。「生徒がその過程を楽しむとき、学びの質や量が強まる」³⁹ように、院生たちにとっても、幸がいることで構えることなく素直な気持ちで学習に取り組み、身をもって、非言語コミュニケーションを読み取る方法や、他者の気持ちを考えること、を学び取れたと筆者は確信した次第である。院生たちに話しかけることは禁じられていたため、院生たちから更生支援パートナー・ドッグ・プログラムを体験した感想を直接聞くことはできなかったが、今回の現地調査により、院生たちの癒し以外にも、他者のぬくもりを知ったこと、他者をしっかり見てどのように接すればよいかを考えること、お互いのルールを守ること、などを理解する学びとなったことは明らかではないかと考える。

4. おわりに

犯した罪自体は法的かつ社会的に非難されるべきことであるが、そのことで犯罪者としての

³⁰ メルソン、2007年、310ページ

³¹ Poresky et al, 1989（ベットを飼育している子どもと、飼育していない子どもを比べたとき、飼育している子どもは、共感の点数が高かったことを報告した。子どもの年齢は、3歳から6歳までである。）；Poresky, 1990, pp.931-936

³² Poresky et al, 1987, pp.743-746（Poreskyらは、子どもの認知能力の発達と、ベットの絆が関係あることを報告している。）；Melson, 1991, pp. 55-65

³³ Salomon, 1981, pp. 9-13（子どもの言語能力を高める働きや、言葉の取得の助けをする可能性がある、と報告している。）

³⁴ Brickel, 1982, pp.71-74；Melson, 1991, pp. 55-65

³⁵ 余語、1999年、12ページ

³⁷ 太田は、「子どもたちの非言語コミュニケーションの発達に動物は欠かせない」（太田、2003年、76ページ）、と述べている。それは、筆者が考えるに、動物と人間は、同じ言語野には属せず、コミュニケーションをはかるとき、お互いの言語を用いることができないため、動物が今、何を考えているのかを何度も何度も観察し、アイコンタクトをとりお互いの気持ちを理解することで、意思を通じあわせるからだ。

³⁸ 北山は、「共に眺めること（Viewing Together）」を「共視」と名付け、共視対象の共有と、言語的交流、身体的共有、情緒的交流が盛んにおこなわれ、情緒的な「絆」が形成されるとしている。（北山、2005年、14-21ページ）

³⁹ Willis et al, 1999, p.151

院生たちの人格までが全否定されるべきではないし、犯罪の要因となった性格的・情緒的歪みを是正する機会を与えられて然るべきである。筆者が観察した、犬との触れ合いによる変容を普遍的なものと断じるにはまだ事例研究の蓄積が必要であろうが、しかし、アメリカの「プロジェクト・プーチ」の事例がある程度その普遍性を予感させる役割を果たしてくれているように思われる。

収容者院生にとってパートナー・ドッグとの関わりは当面少年院在所中だけではあろうが、しかし、更正期間が在所中だけに限られないことを考えると、パートナー・ドッグのような動物と交流できる機会がなんらかのかたちで提供されてよいのではないか。宮川・高山（2013）が報告するように、愛知少年院で「更生支援パートナードッグプログラム」をおこなったことでの効果として、①職員の指導に好反応を示し、安定感が深まること、②癒しの効果、そして③自分の問題性を考えるきっかけになる、としている。

また、山本と山越、筆者を交えた話において、犬を導入した教育をおこなうことでの効果を聞くと、2氏の意見が共通していたことは、次の点である。「犬とふれあうときのルールを知ること、人間社会のルールを学ぶきっかけになる。犬はオヤツを通して、人間と犬とのルールを決めており、ルールを通せば、オヤツがもらえるなど、うまくいく。人間社会でもルールを守ることが良いことになる。そして、人の気持ちを読み取れないがゆえにこうなったため、犬のボディサインを学ぶことで、他者をしっかり見るということを体験し、それが、他者の気持ちを知ることにもつながる。それは、社会でトラブルなく生活し、自分の居場所を獲得していくことにもなる。」

さらに、山本に、愛知少年院で「更生支援パートナードッグプログラム」を実施したことで感じたことを質問した。すると、「愛知少年院では生命犯が多く、犬にふれあう授業により、犬のあたたかさ、そして、それは血が通っているということを学ぶのには最適であった。そして、そんな、あたたかみを自分は失わせてしまった、

二度とこのようなことはしない、と心を感じとってもらえたのではないか。そして、これからも、犬を通して、命の大切さを肌で感じとってほしい。」と彼は答えた。

人の心は、ものさしでは測れない。だが、自分の心のサイズを大きくし豊かにすることで、他者への思いやりの気持ちをさらに育むことにもなるであろう。社会に出たときに、涙を流して喜べあえるそのような仲間をもつためにも、相手の立場になって考え、人の気持ちをくむことを学ぶことは重要である。筆者は院生たちに、幸を通して、自分の素直な気持ちをぶつけ、気持ちの整理をすることで社会化⁴⁰や命のありがたみなど、さまざまなことを学びとってくれることを願いたい。

予算などの面で、少年院に犬を導入するのは容易ではないと推測されるが、犬を積極的に活用し、再犯の防止につとめることができれば、それは刑事政策としても有効ではないかと筆者は考える。さらに、動物福祉の観点から、動物を利用する是非が問われてはいるが、幸は職員にも大変可愛がられており、そして、院生たちとふれあっている幸はとても嬉しそうであった。幸は院生たちとふれあうことを楽しみにしており、幸とふれあう院生たちも、幸も幸せであるのではないかと、自ら犬をはじめ多くの動物を飼育した経験を持つ筆者であるがゆえに、そう確信した。

最後に、今後の課題として、本研究における現地調査は、一事例であるため、今後、再び協力を依頼し更生支援パートナードッグプログラムや他施設の実践事例を検討することで、少年院における犬を介在したプログラムの普遍的な有効性を検証していきたいと考えている。

参考文献

- ・今西乃子『ドッグ・シェルター—犬と少年たちの再出航』金の星社、2003年
- ・太田光明「ペットが、人の健康に果たす役割」（桜井富士朗・長田久雄編著『人と動物の関係の学び方』インターズー、2003年）、75-82ページ

⁴⁰ 社会化とは、「一般的には、個人がその所属する社会や集団の成員になるために、集団成員性を習得していく過程をさす」（長尾、2004年、110ページ）

- ・ 北山修編『共視論—母子像の心理学』講談社, 2005 年
- ・ 竹内一男「子どもの成長過程における動物の存在」『Relatio』(チクサン出版) 2 号, 1999 年, 33-36 ページ
- ・ 長尾和英編著『教職と人間形成』八千代出版, 2004 年
- ・ 福島章『非行心理学入門』中央公論社, 1994 年
- ・ 法務省法務総合研究所編『平成 26 年版 犯罪白書—窃盗事犯者と再犯』
- ・ 前畑友美、小川洋子、出村千佳「更生支援パートナードッグの活動状況と教育的効果」『日本矯正教育学会第 49 回大会発表論文集』2013 年, 165-168 ページ
- ・ 宮川康就、高山孝吉「当院におけるパートナードッグの課題と現状」『日本矯正教育学会第 49 回大会発表論文集』2013 年, 26-27 ページ
- ・ メルスン・F・ゲイル『動物と子どもの関係学—発達心理からみた動物の意味—』ビニング・ネット・プレス, 2007 年
- ・ 余語真夫「人と動物の結びつきの心理学的考察—感情心理学の視点から—」『ヒトと動物の関係学会誌』第 3 巻第 2 号, 1999 年, 10-14 ページ
- ・ Brickel, C. M., Pet-facilitated psychotherapy: A theoretical explanation via attention shifts., *Psychological Reports*, vol.50, Issue1, 1982, pp.71-74
- ・ Melson, G. F., Peet, S., and Sparks, C., Children's attachment to their pets: Links to socio-emotional development., *Children's Environments Quarterly*, Vol.8, Issue2, 1991, pp. 55-65
- ・ Guttmann, G., Predovic, M., and Zemanek, M., The influence of pet ownership on non-verbal communication and social competence in children., *Proceedings of the International Symposium on the Human-Pet Relationship*, IEMT, Vienna, 1985, pp. 58-63
- ・ Poresky, R. H., Hendrix, C., Mosier, J. E., and Samuelson, M. L., The companion animal bonding scale: Internal reliability and construct validity., *Psychological Reports*, Vol.60, Issue 3, 1987, pp.743-746
- ・ Poresky, R. H., and Hendrix, C., *Companion Animal Bonding, Children's Home Environments, and Young Children's Social Development*, Paper presented at the Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Kansas City, MI., 1989
- ・ Poresky, R. H., The young children's empathy measure: Reliability, validity and effects of companion animal bonding., *Psychological Reports*, Vol.66, Issue 3, 1990, pp.931-936
- ・ Salomon, A., Animals and children: The role of the pet., *Canada's Mental Health*, Vol.29, 1981, pp. 9-13
- ・ Willis, M., Hodson, V. K., *Discover your child's learning style: Children learn in unique ways – here's the key to every child's learning success*, Three rivers press, New York., 1999